オトコのコくえすと!
師匠と弟子の物語
きほん17まい　ほんぺん122まい
おとこのこ　の　エッチな　CGしゅう　だ!

魔王とやらが侵略を始めてからもう3年が経とうとしているだろうか

所属していた騎士団が全滅してから、俺は当てのない旅を続けている

生き残ったことを恥じる想いも、
仲間の仇討ちの決意も今では薄らいで感じる

ギルドからの依頼で日銭を稼ぎ、食べて、寝るだけの日々だ

幸か不幸か、魔物退治の依頼は尽きない

今日も俺は討伐依頼があった魔物が出たという森へ出向いていた…

（この付近に出たという話だったが…）

「うわあああ!!」

「!? この声は!?」

「や、やめろぉ！このっ！おろせっ！」
（!? 何故こんな所に女の子が…？）
ウネ
ニュル
ニュル
「くそっ！ううっ！や、やだあぁ！」
（あれは討伐依頼のあったエビルウツボカヅラ…!!）
ウネ

「ふあああ…！なんでそんなとこ…いじるのぉ…!?」
（乳首を丹念にねぶる事からなんでも別名はニプルファッカーとかなんとか…）
ミチル…
「ああっ…や、やめて…いやああ…！」
（むむっ…乳首がちらりと…ヤツは人間を捕食する前に丹念にねぶり尽くすという噂は本当だったか…）

「あっ！す、すみません！そこの人～！
たっ、たすけてください～!!」
「むっ！そうだった！すまん、いい眺めなので
つい見ていてしまった！」

「んんうっ……んっ、ふぐぅ…」
アル…
クリ…
（…う～ん、もうちょっと眺めていたいな…）
ビクッ♥
「は、はやくぅぅ…んっ、んんっ…」
ビクッ♥
「はっ！い、いかんいかん！今助けるぞ！」

「本当にありがとうございました…」
「気にするな、これも仕事のうちだ
しかしなぜこんな所へ一人で？」
「その…父が魔王に討たれたと報せがありまして…」
「…ああ」

「それでその…敵討ちに魔王討伐に出ると国から支度金と家族への補助金が出るというので旅立つことに…家もあまり裕福ではないので…」

「…そうか」

「支度金が乏しかったのでお金を稼ごうと依頼を受けたんですが…はは…」

「…もう少し町の近くの依頼を受けたほうがいいな経験を積んで技術を身につければあの程度の魔物ならすぐ倒せるようになる」

「…はい」

（若い女の身空で苦労しているようだ…故郷で嫁にでも行って暮らしていたほうが幸せだろうに…）

「あ、あの！」
「？」
「さっきの魔物を倒した業、み、見事でした！」
「…？あ、ああ…」
「でっ、弟子にしてください!!」
「……」
「あ、あのぅ…？」
「あ、ああ、すまん…ちょっと面食らってな」

「すまんな、女は弟子に取らん
それに俺のような半端者に師事したところで強くはなれんぞ」
「…へ？」
「女は弟子にしない、悪いとは思うが故郷に帰―」
「あの…ボク、男…です…」
「……えっ」

アルンがなかまになった！

「宜しくお願いします！師匠！」
「そ、そうだな…じゃあその～…まずお前の実力を見てみよう
町の近くに弱い魔物がうろついているから…戦ってみろ」
「はい！がんばります！」
（面倒な事になったな…）

「出たぞ、スライムだ」
「あ、あれなら倒したことがあります！」
「油断するな、動きは遅いが―」
「いくぞっ！」
「あ、おい…」

「いやぁぁぁ～～～、ぬるぬるだ～～～」

「…まずは落ち着け、ゆが～ほど絡みつ～ぞ」

ぬるぬる…

「いっ、実際ヤバ～仮装ち悪っ、っ…」

ぬるぬる…

「足の力を抜～んだ、そいつは動～ものに反応する」

「そ、そっと…ってこっ…が、ちょっとが飲まれちゃうっ……」
「大丈夫だ、体を溶かしたりはしない」
「そ、そっ…ど、どっか体の力が抜けて…そ、そっ…」

「ああ…だ、だめ…ーやっ、やめろー」
「おい、暴れるな」
「ど、どめ…ぱすかっ…」
「…気にするな、生理現象だ」
ぐちゅ…
ぐちゅ…

「や、やだやだ……！おしりに……！んあぁっ！」
ビクッ
「お、おい…大丈夫か？」
「んふっ…ううう…ああっ！お、おくにぃぃ…」
ビクッ
ヌチ…
グプ…

「ふあああああっっ♡あああああっ…♡」
(なんだか妙な気持ちになるな…)
「いやああ…み、見ないでくださいぃ…」
「はっ
いや、そうはいかん
今剥がしてやる、動くなよ」
ぷにっ♡
ぷにっ♡
ぴくっ♡
ぴくっ♡

「うううう…」
「そう落ち込むな、ほら、スライムは大体取れたぞ」
近くの小川で体に張り付いたスライムを
洗い落としながら俺はアルンを励ましていた
しかしまさかスライムに負けるとはな…
「元気を出せ、この経験を次に生かせばいいんだ」
「は、はい…この経験を次に…」
イヤッ…

「あ…やああ…！」
（思い出して勃起するとは…ずいぶん気持ちよかったんだな）
「ち、ちがうんです…！これは、その…」
「あー…そういえばスライムの細胞が興奮剤の成分と似ていると聞いた事があるおそらくそのせいだろう」
「そ、そうなんですか…？」
真っ赤な嘘だがこれでアルンの小さなプライドは守られるだろう

「なに、一発抜けば治まるはずだ」
「!? !? し、しょー!? な、なにを…!?」
なにをやってるんだ俺は…だがこいつを見てると
庇護欲のような加虐心のような
どちらともつかない不思議な感情が湧いてくる…
「大丈夫だ、俺にまかせろ」
「で、でも…はああっ…!」
くちゅ♥
くちゅ♥

「んっ…！んんぅっ…！」
「どうだ？スッキリしただろう」
「はあ、はあ…、は、はい…あ、でも…」
「どうした？」
ぴゅる♥
ビク♥
ビクン♥

「じゃあ…このおしりがムズムズするのも…スライムが入ったからですか…？」
「…どれ、見せてみろ」
「ど、どうですか…？」
「ちょっと…触るぞ」
プリッ♡

「あっ♡んんっ、ふぁあ…」
柔らかいな…もう少し入れても平気そうだ…
ぴくん♡
ズプ♡

ぬぷぷぷ…♥
ビクビク…♥
「あああぁぁ…♡はぁ、ああ…」
すんなり入っていく…もしかしてスライムが潤滑剤になってるのか…？

「あ、あの…どうでしょうか…？」
「ん？あ、ああ、そうだな…確かに少し尻にスライムが残ってるな
何かで掻きだした方がいい」
「何かって…？」
「…ちょっとそこに四つん這いになれ」
ヒク…♥
ぞく♥
しこちゅ♥
ぬぷ♥

「あ、あの…何を…」
「…尻はまだ疼くか？」
「は、はい…」
ヒク…♡
ヒク♡
「そうか…大丈夫だ、そのまま尻を上げてろ」
「…はい」

「し、師匠…そ、それは……！」
「こいつで中のスライムを掻き出すぞ」
ぬち…♥
「んっ…で、でも」
「挿入れるぞ」
「し、しょ……！」

『ふあああっ！！あああっ！』
（おおっ！何て柔らかな肉圧…！）
『あああっ♡なっ、何かっ、おしりがヘンです…ししょおぉ…♡』
（締め付けてくる…！まさか、感じてるのか？）
ズプッ
ビクッ
ビクッ

「よ、よし…掻き出すぞ……！」
「あっ♡ああっ♡ししょー、だ、だめです…♡ちょっと待ってくださ…」
「い、いいぞっ！すごくいい具合…じゃない、違った！スライムが出てるぞっ！」
「ああっ♡ああっ♡も、もう立ってられないぃ…♡」
グポッ♥
ヌポッ♥
ムクッ♥
プルッ♥
ガクガク

マズイ！で、射精るっ……！

「あああぁぁっ♡ああっ♡はあああぁ……♡」

ドクッ♥

ドクッ♥

ビュル♥

ビュル♥

ビクッ♥

ビクッ♥

く、おお…搾り取られる……！

「ふう…ふう…こ、これでもう大丈夫だろう…中のスライムは全部取れたぞ」
「はっ…♡はぁ♡ほ、ほんとですか…？よかった…で、でも何か…まだおしりに違和感が…」
あまりの具合の良さに思わず中に射精してしまった…こいつ、コッチの才能は抜群だな…
コポ…♡
トロ…
ビクン♡
プルプル…

「えいっ！」
「グギャアアアア！」
「や、やった！」
「いいぞ、アルン　だいぶ立ち回りが良くなったな」

「あ、ありがとうございます！師匠…？　あの魔物…何か落として…？」
「これは…何かのポーションだな…毒物ではないようだが…まあいい、お前の戦利品だ、自分で持っていろ」
「は、はい！」
「さて…今日はちょっと疲れたな…この辺で休むぞ、野営の準備をしよう」
「はい、師匠！」

その夜…
「んふふ…ボクの戦利品かあ…」
「ポーションってことは水薬だよね…毒じゃないって師匠言ってたし…ちょっと開けてみてもいいかなぁ」
「くんくん…何だか甘くていい匂い…ちょっとだけ、なら…飲んでもいいかな…」
「…う～ん、いい匂いだけど…味はしないや…」
「…ん、んぅ!?」

「はあぁぁぁ…な、なに…これぇ…」
「か、体が…あつい…が、ガマンできない…」
「んっ♡ああっ♡な、なんかスゴイ…敏感になってるぅ…♡」
くち♥
くにゅ♥

「どうしてこんな…も、もしかしてこのポーションのせい…？んっ♡」
ぬちゅ♡
くちゅ♡
ふぅ♡
ふぅ♡
しこ
しこ
「んんっ♡んふっ、ふぅっ♡」
「んぅっ♡て、手が止まらないぃ…♡」

「ふぐぅっ♡ふぁ♡はあああっ…♡」
はあ♡
はっ♡
とぴゅ♡
ぴゅる♡
「ど、どうしよう…まだ…したい…♡」

「は、あぁぁ…♡あぁっ…♡」
あっ♡
あっ♡
「おちんちんだけじゃなくて…ちくびも…きゅんきゅんするぅ…♡」
ぐにぐにゅ♡
「んっ♡ああ…♡だめ…ししょーに見つかっちゃう…♡」

「はぁあ…♡い…いくぅぅ…♡」
ビクッ
「ふぅぅ…♡ふぁは、ぁぁ…♡」
ビクッ
ビュル♡
ドク♡
「んっ♡ま、まだ…？も、もう手だけじゃ…
…そういえば、スライムと戦ったとき…師匠の…アレで…」